

【モータースポーツコラム】

今回はMSJ直前特別号ということで、MSJ発起人の一人でもある弊機構副理事の石川真禧照、そして第一回目からMSJ事務局長を納めイベント全体を統括してきた理事の高橋二郎のお二人からMSJへの想い、そしてMSJについて考える事、を各々書いていただきました。

MSJ始まりのストーリー、そして、令和のモータースポーツの姿まで、モータースポーツ界、しいては自動車業界の真髓を知るお二人のコラムを、お楽しみください。

まずはNPO法人日本モータースポーツ推進機構の長である日置和夫のご挨拶から。

～モータースポーツジャパンinお台場再開に寄せて～

日頃より当機構の活動にご理解ご協力いただき有難うございます。

コロナ禍で活動の制約もあり、皆様と共にモータースポーツを支える活動を十分に行うことが出来ませんでした。ようやく日本自動車連盟の力強いご協力のもと、お台場で再開できる事になりました。

開始以来我々のモットーである「見て・聞いて・体感する」モータースポーツ活動を支えるイベントとしての考え方には、いささかの変更は有りません。引き続き、皆様と共にこのイベントを楽しめる様、育てて参りたいと考えておりますので、ご支援の程宜しくお願い致します。





石川真禧照(いしかわまきてる)／東京都出身
1947年生まれ
学生時代から国内ラリーに参戦、卒業後は専門紙に入社、モータースポーツの取材を担当。独立後は週刊誌のフリー記者としてモータースポーツをはじめクルマに関する企画、編集、取材、撮影に従事。20代後半からTVの仕事で欧州、中東、東南アジアを14か月間走破。海外の車生活事情にも詳しくなる。国産、輸入車の知識も豊富。現在はAJAJ（日本自動車ジャーナリスト協会）副会長、JMS（日本モータースポーツ記者会）監事を拝命。日本モータースポーツ推進機構副理事長

『モータースポーツジャパンはこうして生まれた』

2006年6月。私と三好正巳理事は、英国のグッドウッドスピードフェスティバルの会場にいた。マーチ卿という一人の英国貴族であり、富豪のクルマ好きが、自分の敷地を使って、モータースポーツのイベントを開催していた。

英国はもとより、世界各地からクルマ好きが集まり、自慢のクルマを走らせ、展示しているのを見て、我々二人は「日本にもこういうイベントがあったらいいネ」と話していた。

そして、過去何度も観に来ているなか、この考えをなんとか実現したくもなっていた。



ちょうど会場にいた国産メーカーの重役と話しをしたところ、「ぜひやろう！」と意気投合し、日本に戻ってきた。

F1を筆頭に、トップクラスのレーシングカーやヒストリックカーを、見たことはあるが真近でエンジン音を聞いたことがない。それはボクたち、業界にいてもそうなのだから、一般の人は、ぜったいに聞いたことがないはず。

そういうクルマのエンジン音だけでも聞かせたい。最初の想いはこれだった。

さっそく、国産メーカーの役員達に話しをすると、「それはおもしろい」ということになり、モータースポーツジャパンは開催が決定したのだ。

実際にイベント開催に向けて準備が開始されたのは、グッドウッドから帰った2006年6月のこと。ボクも三好さんもみんな、こういうイベントにはアマチュアだった。

まずは日本にあるモータースポーツ車両を集めることから始まった。秋にはF1もあるので、その車両を持ってくるできないか参加チームに打診した。

最初は、マシンを並べ、エンジンをかけてもらい、その音だけでも一般の人たちに聞いてもらいたい と考えていた。



ところが、マシンを出展してくれるメーカーやチームの人たちの間から、「音だけではつまらない。せっかく、マシンを持ってくるのだから、走らせよう」という話しが持ち上がった。

そうすると、会場づくりも変わってくる。

走行エリアをつくらなければならない。マシンを持ちこむほうも、メカニックを連れてこなければならない。

しかも、開催はその年の秋。半年しか時間の猶予はない。バタバタと準備が進められた。

そして、2006年10月、第1回モータースポーツジャパンが開催されたのだ。

そのときから16年。2年間のブランクはあったが、再びモータースポーツジャパンが行なわれる。再開1年目は、最初のMSJのように、みんな楽しければいい。手づくり感のある、アマチュアのイベントとしてスタートしてもいいと考えている。





高橋 二郎（タカハシ ジロウ）
1957年 10月16日 東京生まれ・東京在住
職業：フリーランス・モータースポーツ・
ジャーナリスト
NOP法人 日本モータースポーツ推進機構 理
事
日本モータースポーツ記者会 会長
○現在
J SPORTS モータースポーツ中継、ピットリ
ポーター/解説。
J SPORTSのSuper GTトークバラエティ番組
「GTV」（2008年より）メインキャスター

『MSJ再開の喜び、そしてこれからのモータースポーツを考察』

新型コロナウイルス（COVID19）によって世界中でこれまでの生活が制約を受けて、楽しみまでを制限されることとなってしまいました。現在もコロナの変異株に悩まされることが多く、ウイルスと共に生活せざるを得ない状況となっています。

モータースポーツも大きな影響を受けて、一時は殆どのイベントが開催を控える状態が続きましたが、現在は、細心の注意を払ってシリーズが展開され、感染拡大の防止策を厳格に実施し、イベントが行われています。



2006年から始まったMOTORSPORT JAPAN (MSJ) は、初年度から予想を上回る来場者に足を運んでいただけて、モータースポーツファンは勿論、初めてモータースポーツに触れられた方も楽しんでいただけたのではないかと自負しています。

しかし、2020年は、緊急事態制限下で中止を決定せざるを得ず、2021年は、オリンピックの開催も重なり、再び中止を決めました。

が、今年、3年ぶりに日本自動車連盟の主催でMSJの聖地、お台場で開催できる運びとなりました。

われわれのスーパーバイザーである近藤真彦氏が「モータースポーツの出前」と表現してくれたMSJは、より間近でモータースポーツに触れていただけるまたとないチャンスです。

通算17回目のイベントにお誘い合わせの上来場していただけることを楽しみにしています。



今、世界はSDG's、カーボンニュートラルは避けられない目標とされています。

ただ、その目標によってモータースポーツの醍醐味、楽しさ、面白さが損なわれては、なりません。EVによるモータースポーツも一つの方法論であるでしょう。

既存の状態を維持しながら目標に近づける努力を関係者の皆さんが続けています。

われわれの生活になくてはならない自動車を用いたスポーツは、人間と機械。人間の競うという本能と、無機質な機械を思いのままに操るという楽しさ、操るためには、どうすればいいのか考えを巡らせる智力、そして身体的な能力が同時に求められ、それによって楽しめ、満足感を得られる最高の競技です。

また、モータースポーツは、個人競技であると思われがちですが、それは、違います。ドライバーを支えるチームによる総合的な力を競う合うスポーツなのです。

近い将来、歴史的な変革を遂げるであろうこのスポーツの姿を、皆さんと共に見つめていきたいですね。

